

第2回公開講座

「新潟で核問題を考える」

日時：平成23年10月19日（水）

会場：新潟県立大学 1313講義室

講師：加納実紀代（敬和学園大学前特任教授）

佐々木 寛（新潟国際情報大学教授）

進行：小谷一明（新潟県立大学国際地域学部准教授）

司会 では初めに加納先生の紹介をさせていただきます。加納先生はこの3月まで敬和学園大学特任教授でおられました。歴史学研究者として数々の著作を出版し、ジェンダーや核問題などの視点で日本の抱える問題を分析しておられます。

なぜ被爆国日本が原発大国になったのか？

皆さん、こんにちは。今ご紹介頂きました加納実紀代です。今日のタイトルが「新潟で核問題を考える」ということですが、3・11以後、この問題については考えることが多くて、本当に悩みに悩んでいるような状況です。私は歴史を勉強してきた人間です。今日はなぜ被爆国日本が原発大国になったのかという問題について歴史を振り返ってお話させて頂こうと思います。

被爆国につきましては、私自身が広島に被爆者でもありますので、私自身の被爆体験も話をさせていただきます。自分の断片的な体験を話すのは恥ずかしいと思うんですけど、最近では恥を忍んで話そうと思ってきています。と言いますのは、私が広島に被爆したというのは、5歳になったばかりの子供で、非常に記憶も断片的なものしかないんですけど、だんだん被爆者としてしっかりと体験を語られる方たちが亡くなっていく中で、私が被爆体験を何とか語る最後の世代ではないかと思ってきました。

今年、8月6日に広島へ行ったわけですけど、2015年に原爆だけじゃなくて原発で被曝した福島の方々も含めて世界の被曝者の国際会議をやるという提起がなされました。広島、長崎、福島、チェルノブイリ、ビキニ、これまで核の被害を受けた人たちが集まってこの問題を考えようということです。なぜ2015年か、提起した方がおっしゃったのは、広島、長崎に関して生の声が聞ける最後の機会だろう

ということでした。

この写真は45年8月6日午前8時15分、人類初の原爆が広島に投下されたときのきのこ雲です。原爆というものの破壊力、殺傷力には3つあります。熱線、爆風、それからまさに核の特殊性である放射能という3つが原爆被害の大きな要素をなすわけです。広島では9,800メートルからリトルボーイという爆弾をエノラ・ゲイというB29、アメリカの飛行機が投下し、地上600メートルのところ爆発しました。その地表の温度は4,000度～5,000度ということですから、もう鉄も溶けちゃうような温度ですね。それから爆風。秒速200～300メートル。風速30メートルの台風も相当ひどいわけですから、どんなことになるのかは想像を絶するわけです。そういうのが瞬間に来るわけですね。

さらに放射能被害ですけど、急性と後障害の2種類があります。急性の場合は1週間ぐらいから毛が抜けてくる。私も記憶があるんですけど、やけどもしてないおばさまが、髪の毛が抜けるんですよってちょっと引っ張ったらゴソッと抜けることがあって、1週間後ぐらいに亡くなったという話を聞きました。すぐ近所の鶴羽根神社の宮司の息子さんも爆心に被曝したにもかかわらず、何の怪我もなく元気でいたと思ったところが、10日後ぐらいに内臓が溶けちゃうんですね、黒い血を吐いて死ぬ。その苦しみたるや、寝てるなんてことはできなくて部屋中走りまわったという話を聞きました。そういう急性の後障害を何とかクリアして、やれやれと思ったところで半年、1年たって出てくるのが後障害のケロイド、さらに「7年目の白血病、10年目のがん」という言い方があるんですけど、再建に向けて広島も動きだして、自分の人生も考えようとしているときに出てくる恐ろしさがあるわけですね。

原爆被害の特殊性ということについては、「瞬間性、無差別性、根絶性、全面性、持続拡大性」とい

う5つが原爆被害の特殊性だと言われております。全面性は命も暮らしも心も全面的に破壊することで使われております。さらにそれが持続し、場合によっては拡大する性格を持っている。そういう特種な爆弾で被害を受けた後の広島風景ですけど、今回の大震災の後の光景が、広島と同じだという被爆者もいらっしゃるんですけど、私は違うと思いました。私の記憶にある広島被災後の風景は、まさにこれなんですね。



ヒロシマの原子野

原民喜という広島作家の『夏の花』に挿入されている詩の一節「パット剥ギトツテシマツタ アトノセカイ」。これがまさに広島跡。つまり瓦礫なんてないんですね。今回津波の後にどうしていいかわからないほど瓦礫があるわけですけど、広島で処分に困ったという話を聞いたことはありません。死体の処分には困ったと言います。1週間のうちに7万人が死んだわけですから。8月から12月までに14万人が死んでいます。「パット剥ギトツテシマツタ アトノセカイ」。まさに詩人ならではの言葉だと思います。やはりカタカナじゃないとダメなんですね。無機質なイメージは。

私は二葉の里という爆心から1.9キロとか2キロ弱のところまで被爆をいたしました。このとき私は5歳と20日目、まだ小さい子供で、一番心につらく残っているのはカッチャンとミチコちゃんの死、とりわけカッチャンの死が本当に強く残っています。と言いますのは、カッチャンは私と同じくらいの年の男の子で、いつも近くの鶴羽根神社の境内で遊んでいました。この日も朝、B29が行ったというので、外で遊んでいたんですけど、何かの理由でけんか

をして、私は「もう、あんたなんかとは遊ばん」となりました。裏にキハラミチコちゃんのおうちがあって、けんかした後、そのお宅に行きました。ミチコちゃんら現在の中学1年生は、建物疎開の後片づけのために働かされていました。おばちゃんが家に上げてくれて、たんすの上から着せ替え人形の箱を下ろしてというところに、ピカッと来た。

夏なので戸が全部開け放ってあって、小さなぬれ縁の先に庭があって、その向こうに波板のトタンの塀があったんです。それがうわーとこっちに向かって倒れかかってくるというところまでは記憶があるんですけど、あとは何が何だか分からなくて。気がついたらキハラさんのおばちゃんが倒壊した家の中から連れ出してくれていたんで、大してけがもせず助かったわけです。ただカッチャンは、私とけんかした後もそのまま神社の境内にいて被爆をしたので、熱線をもろに受けました。1.9キロぐらいで亡くなった方はあまりいなかったようですが、カッチャンはちっちゃかったせいか、1週間後ぐらいで亡くなったと思います。1回だけ家をのぞきに行ったら、「顔が痛いよ、痛いよ」と言ってる姿を見て、怖くて一目散に逃げました。後で亡くなったのを聞きました。

それからミチコちゃんは、私たちのところよりもっと爆心に近い、1キロ以内ぐらいのところまで被爆をしたんです。広島市女という市立高等女学校、ものすごく被害の多いところ。8割ぐらいの子供が亡くなっているんですけど、ミチコちゃんは自宅まで帰ってきたんですね。私はパッと見たときにミチコちゃんの顔がまるでジャガイモみたいだと。ああいう色をして、顔中がポコポコとして。所々皮がむけていて「あ、ジャガイモ」って思ってしまったんです。翌日か、その翌日かの明け方に亡くなる時、母に連れられて行ったんですけど、そのときにはもう顔がぼんぼんに膨れて、ジャガイモじゃなくてドッチボールだと。焦げ茶色で真ん丸に顔が膨れて、目も鼻もないようなかたちで亡くなっていきました。

カッチャンとけんかしないで、そのままいたら今いないんだというようなことを時々考えます。

それから、支援物資が岡山の辺からおにぎりを届けに来て、トラックの止まっているところまで被災者が取りに行く。おにぎりをもらいに行く道中は、真っ黒焦げの死体が転がっている。その中を怖くも

なんともなく歩いて行ったんです。ただ怖かったのは首のない死体。首があれば、これは首がありますので怖くない死体です。だけど、どういう加減なのか、首のない死体を見てもものすごく怖い。そういう首があるかないかというのだけを気にしながら歩いたという記憶があります。

大きくなってこういう死体のそばに5歳の幼児を立たせて、首があるかないかだけ気にして歩いている姿を想像してみると、胸が詰まってしまうんです。ただ広島で終わったわけじゃない。戦後ずっとイラクでもアフガニスタンでも、いろんなところでそういう子供がたくさんいたはずですよ。

ただ、男性被害者と女性被害者の間には差異があります。3年ほど前、広島平和研究所のプロジェクトで被爆者の聞き取り調査をしたわけですけど、その中でやはり男性被爆者と女性被爆者の体験の違いを痛感しました。ある女性は当時19歳で結婚したばかりで、今もお元気で8月6日に語り部として体験を語っていましたが、そのお話が心に残っております。

原爆のやけどは放射能が染み込んで皮膚の組織を破壊していますので、何回も手術をするわけです。この方は18回整形手術を受けました。顔が焼けただれて、まぶたも唇もない。右手も焼かれているという状況です。特に女性で顔にケロイドがあるというのは、美醜の問題として大変だろうと思っていたんですけど、そんな生易しいものじゃないんですね。まぶたを焼かれるというのは、寝るときも目を開けたままで寝なきゃいけない。唇がないってことは、お茶を飲んでもこぼしちゃう、よだれが垂れっぱなしということです。彼女は整形手術をするとき一番にももの皮膚を取ってまぶたをつくってもらった。「目をつむって眠れることがこんなにありがたいことかと思いました」というお話を聞いたわけです。それから右手がケロイドで利かないので、若いお嫁さんとしてお姑さんにいびられたりして。手術をするわけですけど、ケロイドの再生しようとする力が強くて結局は骨を脱臼させてしまったと。

もちろんまぶたがない、唇がないっていうのは男性にとっても大変だったと思うんですけど、右手の利かないお嫁さんのつらさとか、いろんなことを伺いました。女性被爆者に対しては結婚差別、男性被爆者以上にありました。私自身も非常に悩みました。今年、長崎に行って専門家から話を聞いたとこ

ろ、放射能の影響は精子のほうに大きな影響を及ぼすという結論が出たと聞きました。井伏鱒二の『黒い雨』でも被爆しているのが妊婦が結婚できないというのがテーマになっておりますし『夢千代日記』という吉永小百合が演じた主人公もそうです。女性の場合、結婚できない、子供が産めないという被害が男性以上に強かったと感じています。

そういう被害を受けたにもかかわらず、なぜ原発を導入したのか。今回福島的事件が起こった後、外国の方々からも聞かれました。これは日本が広島、長崎の原爆の直後に降伏するわけですけども、その降伏、敗北したことを日本国民はどう認識していたのかを考えなければならないと思います。

8月15日正午の昭和天皇の「玉音放送」の後に、内閣としてなぜポツダム宣言を受諾し、降伏したのかを正式に政府として発表します。内閣告諭といわれるものですが、その中に「ついに科学史上未曾有の破壊力を有する新爆弾の用いられるに至りて戦争の仕法を一変せしめ」と、原爆が敗北に大きく働いたことを正式に言っております。

この認識は支配層に非常に共通していて、昭和天皇自身にもそういう感じの言葉がありますし、最近見つけたものでは11歳で日光に疎開をしていた当時皇太子（現天皇）の8月15日の日記にもあり、びっくりしました。日本人はいかに国民挙国一致、心を合わせて戦争のために頑張ったかが書かれた後、淡々と「けれども、戦いは負けました。それはアメリカの戦争ぶりが非常に上手だったからです。攻め方も上手でなかなか科学的でした。ついには原子爆弾を使って何十万という日本人を殺傷し、町や工場を破壊しました」と書かれています。

その当時は、鬼畜米英といってアメリカなどは鬼とか何とか、とにかく憎々しげに国民に憎悪を植え付ける情報が流れていたわけですけど、皇太子自身は戦争ぶりが上手だったからとあっさりと肯定している。このように今度は日本も科学技術の発展に努めなきゃいけないという日記はたくさんあります。原爆、アメリカの科学技術に負けたんだという認識が政府も、国民にも共有された。

しかし、日本の近代、明治維新以後を振り返ってみますと、いわゆる戦争は1894、95年の日清戦争、10年後の日露戦争、さらに10年後の第1次世界大戦、1941年のアジア太平洋戦争と、この4回が戦争というふうにな名前が付いている。でも日本が軍事行

動、海外派兵をしたのは4回ではない。明治維新以来1945年までの77年間に海外派兵を14回もしている。5年に1回戦争をしているということです。原爆というのはそういう日本の侵略的な歴史の最終段階です。だから原爆だけが突然ボカンと落ちてきたわけではなくて、それ以前にずっと日本が攻めるといって戦争を続けてきた揚げ句にあったということです。

原爆が敗北の原因だととらえると、原爆を落としたアメリカに負けたとなるわけですがけれども。特に1931年から45年にわたる日本の侵略の中では中国の非常に粘り強い抵抗があり、その結果としてアメリカとの戦争にも打って出ざるをえなくなる状況があるわけで、原爆だけではなくて、アジアへの戦いも敗戦の原因として考えるべきではなかったかと思えます。

にもかかわらず原爆に負けた、アメリカの科学技術に負けたという認識を持った。日本は日清戦争にも勝ったというようなことで、アジア諸国に対してさげすみのまなざしを持ち、植民地にし、日本は一等国民だと威張っていたわけですがけれども。そのアジアへの蔑視というものを改める機会を持たないで、戦後も継続させてしまった。その一方で、アメリカへの憧れ、科学技術信仰。その最先端のものとして原子力利用への夢というものを持って戦後出発するということなんですね。

私は最近、この広告を早稲田大学の加藤哲郎さんの研究で知ってびっくりしたんですけれど、アミノピリン何とか配合って1948年に出た「ピカトン」という風邪薬。原爆のことをピカッと光って、その後ドンと。これがまさに熱線、爆風というので「ピカドン」という言い方をしていたんですけど、それを「ピカトン」というような風邪薬にして、きのこ雲

を絵柄に使う。何万の広島、長崎市民を殺したにもかかわらず、原爆を素晴らしい力を持ったものと肯定的に受け止めて広告に使う。もう一つ見たのは避妊薬ですね。当時「産めよ、増やせよ」が一転して「産むな、増やすな」となってベビーブームの中で発売されるんですけど、そこでもきのこ雲が使われていました。一体日本人は何を考えているんだろうと私はショックを受けてしまったんです。

それから、手塚治虫の漫画『鉄腕アトム』の連載は1952年からですがけれども、これもやはりアトムという原子力が非常に肯定的に受け止められた結果として人気になっているということです。それから被爆者でも非常に肯定している。放射能学、医学の専門家、教授で、彼自身もそれで亡くなりますけれど、永井隆の『長崎の鐘』。皆さんも「ああ～長崎の鐘が鳴る～」っていう歌とかでご存じかと。その最後のほうに、息子と父の対話があって子供が原子力は「爆弾のほかに使う道はないの？」って言ったら、父の永井隆は「調節しながら破裂させたら、原子力は汽車も飛行機も走らせる、石炭も石油も要らなくなり、人間はどれほど幸福になるかしかないね」というようなことを言う。息子は「じゃ、これからなんでも原子でやるんだな」と。これが1949年ですね。

さらに武谷三男という物理学者で、非常に哲学のある科学者だと思ってきたわけですがけれども彼の言説を福島以後調べてみて、非常にびっくりしたんです。彼が1952年に書いた論文の一節ですがけれども、「日本人は原子爆弾を自分の身に受けた世界唯一の被害者であるから、少なくとも原子力に関する限り、資格がある」というようなかたちで、逆に被爆国だから原発を利用すべきだという論を立てて、大きく全体を動かしていく。



戦後に発売された風邪薬



鉄腕アトムと核の平和利用

直接的には、その翌年1953年にアメリカのアイゼンハワー大統領が原子力の平和利用を言い出したことから、日本の原発が国策として動き出すわけです。45年段階ではアメリカだけが核兵器を持っていたんですけど、49年にソ連が原爆を開発し、アメリカが水爆を開発したらまたすぐ水爆も開発するというので、アメリカは危機感を持つ。そして、原子力利用の技術を提供することにより西側同盟諸国をアメリカの支配下に置こうという方針に転換します。これを受けて、日本では中曽根康弘と正力松太郎の二人が現在の原発政策というものを起動させる。53年12月にアイゼンハワーが平和利用を言い出したら、もう翌年の3月に原子炉の築造のための予算を国会に提出し、ろくな議論もせずに衆議院を通過させてしまう。

正力松太郎は読売新聞の社主で、原子力主義者であり、55年から衆議院議員になるわけです。最初に原子力担当国務大臣になり、56年には原子力委員会初代委員長になるというかたちで、政治における原発政策の中樞を動かすと同時に、自分の持っている読売新聞、それから日本テレビを総動員して原発の平和利用の宣伝に努める。

この写真は1956年の元旦の読売新聞ですけど、ここでも正力松太郎と中曽根康弘は、いかに原発を導入すると電化製品をふんだんに使えて、女性の家事労働が軽減されるかというように、婦人欄とか家庭欄で何度も女性をターゲットにしながら原発を推進しています。原水禁運動においても原発を容認し、原子力は人類の繁栄のためだということで平和利用を容認する。原水爆という爆弾、兵器は反対だけれども、平和利用はいいんだってということを最初の段階から宣言の中に含んで出発したということですね。

ここであらためて原子力の平和利用はありえるかということを考えてみたい。原子力は、そもそも戦争のために開発された。これはアメリカがナチスに持たせたら大変だということなので、大慌てで42年からマンハッタン計画で開発するわけです。つまり今問題になっている核廃棄物の処分をどうするかとか、そういうことをきちんと考えて開発したわけじゃないんです。とにかく破壊力を早く手に入れようということをやっています。

日本でもやっていたわけですけど。戦前の資料の中でも原爆ってというのはマッチ箱大で丸ビルを吹っ

飛ばす。一発でTNT火薬2万トンに相当する。すごい効率性のある破壊力、これぞ科学技術の粋と言われるわけです。元はやはり兵器でありまして、そういうものを制御しながら使うと言うわけですけど、人間の力で制御し切れるかどうかです。読売新聞は原発について「ついに太陽をとらえた」というかたちで連載を組んでいます。東海原子力研究所で1957年8月27日に臨界に達し、初めて原子の火がもったときに、読売は「天の火を人間は手にした」というふうに記事にしています。まさに人間の傲慢がここに見えると私は思います。やっぱり原発と原爆は同じであって、生産性とか効率を追究した力の論理が生み出したと思います。

つまり近代は、生産性とか効率を求めて突っ走ってきた。日本の近代は明治維新以後、富国強兵を求めてきた。揚げ句が1945年の敗戦だったわけです。その敗戦の受け止め方が間違っていたと思うわけですね。力の論理で負けたのだから、力の論理でやり返そう。憲法上、兵器を開発するわけにはいかないので、平和利用という怪しげな言葉にくるんで。岸信介といったA級戦犯などは平和利用と言いながら、潜在的核武装にもつながると考えていたのではないかと。

私は1945年が第一の敗戦とすれば、2011年は日本近代の第二の敗戦ではないかと。第一の敗戦においては力の論理をきちんと否定するどころか、新たなかたちでその流れに乗ったわけですけども、福島を契機としたこの第二の敗戦においては、近代の論理そのものを徹底的に問い直すという契機にすべきだと思っています。

最後、「新潟の地で」というのが今日のタイトルなので「新潟を再生の地に」を最後に付け加えました。私は福島の飯舘村とか南相馬に行ってみて、本当に青々とした綺麗な野山であるにもかかわらず人っ子一人いない。どうやればそれを再生できるのか。「死の町」って、この間大臣が言ってクビになりましたけど、でも本当に「死の町」ということをきちんと直視するべきだと私は思います。

この福島に対して、新潟は何ができるだろうか。私は新潟の豊かな田んぼが減反とか後継者がいないということで放置され、セイタカアワダチソウが茂りに茂る状況がどんどん増えてきたという印象を持っています。延々と先祖の方々が大地を耕し、コシヒカリという素晴らしいお米が採れるよう

にした大地が放置されている。ここに福島の農民の方たちを何とか迎え入れて再生の道につなげられないか。非常に勝手なことで、もちろん個人の力でできることではありません。

それから柏崎刈羽。もし事故が起こったら福島の比ではないですね。規模が倍あります。しかも福島の場合は放射能が太平洋という広いところに流れますけど、日本海という東アジアの内海に流れたら日本海は死にます。それだけではなくて東アジアの海、大地は死にます。これを何とか廃炉に向けていく努力がますます必要と思っています。

司会 加納先生、ありがとうございます。では、佐々木先生です。

では次の講師、新潟国際情報大学教授の佐々木先生を紹介させていただきます。佐々木先生は政治学を専門とし、特に平和や民主主義の研究でご活躍されております。

新潟で核問題を考える

こんにちは。佐々木です。今回「新潟で大震災を受け止める」というタイトルを頂きました。私もどうやって今回の出来事を受け止めたらいいかをずっと考えていました。

私は1966年生まれです。ちょうどビートルズが初来日した日に生まれました。高度成長期の真っただ中です。私は手塚治虫の『鉄腕アトム』を見て育ち、野球は大の巨人ファンでした。当時は長島や王が活躍した巨人の黄金時代ですね。そういう中にいたせいか、私は『鉄腕アトム』のお茶の水博士のようになりたくて、高校時代は理数科に進みました。当時は理論物理学者ほど格好いいものはないと思って、いつかアインシュタインのようになりたいと思っていました。今、平和研究という理系と文系を架橋する分野をやっているのですが、そのときの名残といいますか、現在の研究テーマである核問題も、こういった子どものころのあこがれとつながっているというふうに思っています。

今回3・11をきっかけに、「核時代」という言葉が私の中に浮かびました。奇妙な言葉だと思います。つまり、時代にテクノロジーの名称が付くというのは、かつて学校で習った青銅器時代や鉄器時代以来ですね。20世紀の人類史はまた再び、テクノロ

ジー、科学技術の名前がくっついた名称で語られるようになりました。

核時代の幕開けを写真でふりかえってみましょう(パワーポイントで示す)。この写真は原爆ドームの近くで、こちらは長崎、浦上天主堂の近くだと思います。廃虚というのはどれも非常に似ているんですけども、20世紀は核のテクノロジーと同時に、人が住んでいるところを空から見下ろして爆撃することが発明された世紀だと思います。この次の写真は東京大空襲です。先ほど加納さんは瓦礫がないとおっしゃっていましたが、これは核の攻撃ではないのですが、やはり広島に近いというか、「パッとはぎ取ってしまった」という感じです。

私のやっている平和研究では、ジェノサイドということばは重要です。「ジェノ」は生命とか生物ですね、ゲノムの「ゲノ」です。それを根こそぎパッとはぎ取ってしまう、そういう新しいタイプの暴力が20世紀に生まれてきたと思います。20世紀の暴力は誰かが誰かを個別に憎くて殺すのではなくて、いわば数学的に大量の命を奪っていくというタイプの暴力だったと思います。この前の震災と福島第一原発の被害を受けたときに、私たちは核の危機、核時代に生きていることを思いさざるをえませんでした。それは同時に、このような「ジェノサイド」ともいべき大量破壊の論理を想起することでもあったと思います。

3・11東日本大震災をどう考えるかというときに、言うまでもなく「天災」であることには間違いあり



KYODO Photo. 電報709「モノクロ」『新年XY17』戦後60年特集「変わりゆく巨大都市・東京」◎廃虚から復興都市、未来へ。廃虚となった下町上空 戦後間もない東京・隅田川周辺の下町一帯。空襲ではほぼ全城が焼き尽くされた=1945年10月 20041111

戦略爆撃の跡(東京・隅田川周辺)

ません。しかし最近では、福島第一原発は地震そのものによってずいぶん壊れたのではないかという指摘がなされています。原発事故は、単に津波による電源喪失のせいにはできないかもしれないというのが今の争点かと思えます。そうすると、現在日本にあるすべての原発の安全性にも疑問が生じてきます。いずれにしても、原発事故は、「人災」の要素が高い。以前からマークⅡといわれる機種は非常に問題がある、安全ではないという警鐘があったわけですから。東京電力は原発が壊れる確率は5千年に一度と言っていますが、原発が事故を起こしてしまえばそれで終わりですね。

梅原猛という人類学者が、「文明災」と言っていますが、3・11は「天災」「人災」「文明災」、3つとも視点から考えるべきだと思います。そしてこの「文明災」というのは何か。広島、長崎、東京大空襲と比べると、原発事故による被災地域の風景にはちょっとだけ違いがある。同じように根こそぎやられているんだけど建物が結構残っていて、そこに人がいない。人はいないけれど家畜が走っていたりする。非常に奇妙な風景です。つまり外側から生活空間や文明が破壊されるというよりも、いわば自分たちの内側、電力をつくるという非常に日常的な次元から世界が壊れていくというイメージです。私はキューバ危機以来、人類が減びるとしたら核戦争のような人類の責任に端を発することによるものじゃないかと思ってきました。たとえば人為的に変異したウイルスで人類が減びるとか、原発に次々と事故が起こって、文明が内側から壊れていくのではないかという予感です。「文明災」はそういう種類の内発的な破壊を意味すると私は思っています。

そして、先ほど申し上げたように、私たちはずっと核の危機と共に生きてきたことを思い出さざるをえないわけです。アメリカが最初に核開発、核使用をして、ソ連が49年に核実験をした後に米ソの核軍拡競争が始まる。そして両者が核兵器を大量に持つようになると、今度は相互に核抑止が働き、核は実際には使えない兵器になっていく。使えない兵器になったとき、それをどう政治権力に転用するかという論理から、いわゆるアイゼンハワーの原子力の平和利用という話が出てくるわけです。

ご存じの通り1954年に第五福竜丸の事件があります。62年はキューバ危機。世界が一番核戦争に近づいた年です。それから86年はチェルノブイリ。そし

て2011年の3・11。もちろん79年のスリーマイル、99年の東海村を入れてもいいのですが、いずれにしても私たちは核兵器と原発事故と共に生きてきたことをもう一回思い出す必要がある。この歴史的な流れの中で、今回の出来事を受け止めるべきだろうと私は考えています。

原子力の平和利用は「Peaceful Use」と最近使いますけれども、本来「Military Use」と「Civil Use」であり、この言い方はごく日本的な言い回しだと思います。「平和」利用という言い方は戦略的といいますか、先ほど正力さんの話が出ていましたけれど、いわば政治的なキャンペーンのための造語であったと私は考えています。

ワシントンの近くにあるナショナル・アーカイブスという、アメリカの公文書が公開される所に行くと、1950年代の資料の一部を、片端から見ると、驚いたことに50年代半ばに沖縄で原子力発電所をつくらうという計画があったんですね。これはこの前、朝日新聞に載っていましたが、最初に発見したのは私なんです（笑）。資料を眺めていて、第五福竜丸事件の時に本当にアメリカ政府は危機感を持っていたということが伝わってきました。ですから日本の世論に、働きかける仕事をたくさんするわけです。その延長線上に正力の原発博覧会とか、たくさんキャンペーンがなされていたと思います。

この写真は私が訪れたカリフォルニア大学パーカー校のローレンス研究所です。核兵器の理論的部分は、この研究所でつくられました。ここでマンハッタン計画の一部が行われ、ニューメキシコでの核実験の後、原爆は広島に持っていかれた。私がアメリカに行こうと思ったのは、そこが、核兵器が作られた場所であり、またその後平和利用として再び東アジアに原子力技術が拡散する出発点だったからです。そのプロセスを追っていくことが、私が巨人ファンだった少年時代、鉄腕アトムが好きで未来はずっと明るい、そして冷戦なんか絶対に終わることがないと信じていた自分自身を読み解くことにもなる、と思ったわけです。

この写真は、1947年の写真です。最近も多少の放射能なら体に良いと言った人がいますよね。50年代の初頭ぐらいまでは多くの人々が、放射能は文明を進歩させるものだと思っていた。見て分かるように、きのこ雲を浴びた患者さんが車椅子から立てる

よくなるというイメージです。これは今はもう発刊されていない『コリアーズ』という、当時は販売部数の多かった雑誌の写真です。ソ連が核実験をするまで、アメリカの普通の大衆は原子力というのは進歩の象徴だし、ナチスや日本を追っ払った良いものと考えていたと思います。ところがソ連が核保有をしたことで、アメリカも核攻撃されるかもしれない。その瞬間から論理が変わっていくわけです。

平和利用の論理が出てきたのには、3つ理由があると思っています。1つは核兵器というものは使えない兵器になっているわけですから、その使えない兵器を有効利用しようということですね。当時ニューロック戦略といって米政府が軍事費を削減しようとしていたことも背景にありました。

2つ目に、当時米ソは人工衛星などを飛ばし合って競走していたのですが、さらに「平和合戦」、つまり平和と繁栄のイメージもまた東西間で争奪し合っていたということが言えます。従って、平和利用という言葉自体が、西側の陣営にいれば核の力で豊かになれるというキャンペーン、つまり核の正当化として利用されていたということだったと思います。この文脈で、先ほど申し上げたような、「沖繩で原発を」という動きも理解できます。

3つ目はさらに重要です。アメリカが考えた核管理体制の確立とは何かと言うと、核の技術を同盟国に渡すことと同時に、同盟国に核兵器をつくらせないということも意味しています。原子力で発電は認めるけど、それ以外は監視をして核兵器をつくらせないようにする。これは現実主義的に考えると、原子力の技術、平和利用を認めることによって核の拡散を防ぐという戦略です。つまり、自分たちの少なくとも同盟国は核を持たないようにしたいという思惑もあったのではないかと。この論理を知っている人は、それなら日本も核武装すればいいじゃないと思うわけです。岸信介だけではなくて、歴代の政策決定者の多くの人たちは、こういうリアリズムの中で考えれば日本も核武装すればアメリカに対等なものと言えるところで考えるわけですね。

もう一つ皆さんにお話したいことは、平和利用の問題は日本だけ考えていても分からないということです。原子力の平和利用は、冷戦の中で韓国、台湾、フィリピンも含めて東アジア地域に広く普及してきました。今や、世界で最も核が密集しているのが

東アジアです。その核地域、ニュークリア・リージョンに、私たちは住んでいるということに自覚しなければなりません。先ほど柏崎が事故になると大変なことになるというお話がありましたが、たとえば玄海原発が壊れた場合、これも日本列島全部が被害を受けるでしょう。中国の東海岸に3つの原発（秦山原発）がありますけれども、そのどれかが壊れた場合も、日本及び韓国も含めて国境をこえた広範囲の地域が被災することになるでしょう。

だから、私たちは日本の原発だけを心配していてもだめだと思います。東アジア全体が原発を推進する体勢をもっているわけですから。核開発をしていた当時は、まだ韓国も台湾も民主化以前でした。フィリピンも。ですから、全部いわゆる権威主義体制下で核開発が進みました。そしてどの国も原発と核兵器との両にらみの開発を進めてきました。北朝鮮だけではない。原子力発電と核兵器の開発は一体不可分であったということが重要です。それから国境を越えたプロジェクトであったということ。そしてそのフロントランナーは日本だったということです。

ですから核開発というのは、一貫して日本の場合も政治主導でした。科学者も、はじめはそれほど乗り気ではなかった。財界も後で便乗したけれど、別に彼らが先導したわけではなかったと思います。ご存じのように台湾も韓国も電力会社は1社です。日本はまだ9社ありますから、ある意味では多元的です。こういった1社独占である国々にとっては、まさに原発は国家事業そのものなんですね。権威主義体制のもとで一元的に核開発が進められてきた。それゆえ反原発運動は、自ずと東アジアでは民主化運動と密接にからんできました。そういうことを、私たちが「フロントランナー」として知っておく必要があると思います。

私たちは世界最大820万キロワットの柏崎原発を持っているわけですが、これを新潟でどう引き受けるかを考える場合、考えておく必要があることがあります。福島第一原発も柏崎刈羽原発も東京電力のもので、同じ会社なので、福島でもし損が出れば、柏崎で補わなきゃいけない。だから私たちはその電気は使ってないけれど、今や福島の不在を補てんするために原発を抱えているということもできます。

ですから第1に、もう一度広い視野を持って考え

直す必要があります。日本国内、福島もそうですし、原発が立っているところは、日本の南北問題、あるいは開発政治がもたらしてきた問題を抱えています。それを単に反原発とか脱原発というだけじゃなくて、あるいは東京電力が悪いとか、首相がだらしがないというだけではなくて、より深く考える必要があると思います。われわれが目指してきた戦後というもの、開発や経済成長というものをどう考えるのか。東京の電力を新潟や福島でつくるということもこれからも続けていくのかどうか、私たちは考えなければなりません。

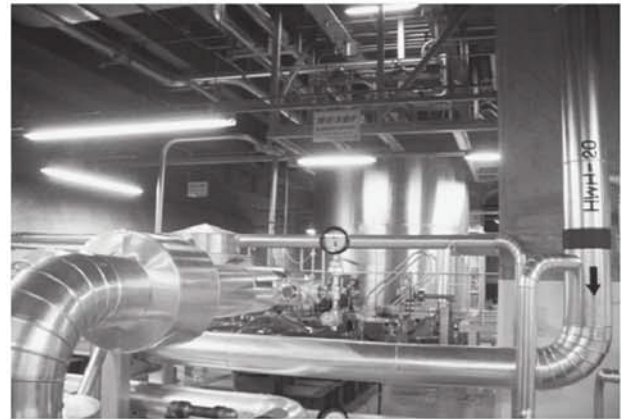
2つ目は、地方自治体にとっての安全保障とは何かを考えなければならなくなっています。安全保障というのは、普通は国家の占有事項ですけれど、もはや自治体も自らの安全保障を考えなければいけない時代が来ている。今、新潟県の知事はある意味、原発の再稼働について慎重な立場ですし、日本中のいろんなところでそういう動きがあります。首長というのは直接民主主義によって選出されます。だから自治体の住民の意見を聞かざるをえない。そうするとその人がもともと反原発かどうかとは別に、地方財政が許す限り原発からは脱したいというふうになるでしょう。そういう流れがこれからも出てくると思うんです。ですから安全保障の問題は、私たちにもごく身近な問題になっていると思います。

最後は、私たちの生き方、文明の在り方そのものを考えるきっかけになるのではないかとことです。これは「言うは易し、行ふは難し」です。どういう電気を使うのか。どういう食料を食べるのか。どういう教育をし、老後のケアをするのかという人間の生活や生命にとって基本的な問題から、地域や社会、国家や世界を考えていかなければなりません。その意味で、世界最大の原発を抱える新潟は、実は鍵となる地域、キー・ローカルエリアになっていると思うんです。

つまり、福島を受け止めて柏崎をどう考えていくのか。賠償をどうしろとか、東電が許せんというだけではなくて（もちろんそれは最重要課題ですが）、もっとわれわれの生き方とか、地方と中央の関係とか、そういうことを根本から考えていくきっかけになるのではないかとことです。

私はこれまで何度も柏崎原発を見学してきましたのですが、実は結構安全だと思っていました。たとえば原子炉の下のほうにあるホウ酸注入装置ですけど、

いざというときはこれが稼働して、核反応は止まるという説明を受けていました。だから原発は危険だけど、相当にいろんなバックアップがあると思っていました。ところが、3・11のときにテレビを見ていたら、すぐにホウ酸が出たというニュース。その瞬間に「これは最終手段じゃないか」と思いました。その後は多分、現場ではもうなすすべがなかったのではないかと思います。



柏崎刈羽原発のホウ酸注入装置

この写真は柏崎刈羽原発の中央制御室です。IAEA（国際原子力機関）が2007年の地震のときに調査に来て驚くわけです。彼ら現場の社員たちは職場を見捨てなかった。地震のときも最後までここにおいて、原発を守ろうとした。「何であなたたちは家族のところへ帰ろうとしなかったのですか？」とIAEAの人たちは質問するわけですね。現場の彼らは非常にまじめに職務に取り組んでいます。しかし、ふと中央制御室の後ろを見ると不思議なものがある。神棚です。毎日安全をお祈りするらしいのです（会場 笑）。やっぱり技術に100%はないわけです。核の力を完全にコントロールしえると考えるのは、やっぱり傲慢だったんじゃないかと今では思います。

私は再びアメリカに戻りました。マンハッタン計画によって核時代の扉を開いたアメリカ、特に西海岸のカリフォルニアは依然として数多くの老朽化する原発が立ち並んでいます。しかし一方で、オバマ政権はグリーン・ニューディールなどさまざまな政策で、新しいエネルギー戦略を模索しているんですね。私が訪れたカリフォルニアには両義性がありました。原発もあるんだけど、新しい試みも始まっていました。

ここで最後に、皆さんに幾つかの事例を紹介して、今後新潟でこの問題をどう考えていったらいいのかというヒントにしたいと思います。

この写真はディアブロ・キャニオンという原発です。PG&Eと書いてありますね。日本でいうと東京電力みたいな代表的な会社です。ちょっと南へ下ると、サンオノフレという国立ビーチがあって、そこにも原発があります。アメリカで最も古い原発のひとつですけれど、日本製のところが多いようです。ここはビーチですから、みんな海水浴とか釣りをしているんですね。この人は「ここでよく魚を釣って家族で食べている」って言うんです。私が訪れた当時は、住民はあんまり自覚がないんだなと思っていたのですが、3・11を受けて、地域住民がサンオノフレの原発の安全性に問題があるんじゃないかと集会を開いて、ここも今問題化しています。



米国西海岸の原発に隣接する海水浴場

次に、カリフォルニアのウィンドファーム（風の農場）、風力発電所を見てください。見渡す限りの巨大な風車です。広大なアメリカだからできるのかな、とも思います。かなりの部分のカリフォルニアの電力をまかなっています。それから次に、これは州都サクラメントにある電力会社です。これはわれわれが将来つくる電力会社のイメージにもなるでしょう。7人の理事すべてが市民の公募によって選ばれます。市民の市民による市民のための電力会社です。1989年に住民投票によって、当時トラブルが絶えなかった原子力発電所の閉鎖を決定しました。その代わりに彼らはよりクリーンで持続可能な未来をうたって、風力や太陽光発電でそれを補いつつ、地元消費を抑えるさまざまな工夫もしました。今

は最も安定的に電力を供給する会社として存続しているんですね。

2000年の夏にカリフォルニアで大停電がありました。この大停電のときに、唯一サクラメント電力公社の供給する地域は被害が少なかったといいます。先ほど地方自治体の安全保障を考える必要があると申し上げましたが、実は分散型エネルギーシステム、中央で大量につくって配るのではなくて、地域で電力会社を自前で持つことは、安全の観点からも有効であるかもしれません。

最後に、日本は東京からは変わらないと思います。日本が変わるとすれば、それは地方からだと思います。どういうふうに変えていくか。一番大事なことは、食や水、エネルギーや教育、ケアといった生命や生活の根本から考え直して、望ましい社会を構築する本当の民主主義の実践を始めるということです。『三酔人経綸問答』という中江兆民が書いた面白い本があるのですが、3・11後に読み直してみました。そこには、民権には2種類あると書いてある。「回復の民権」と「恩寵の民権」です。「恩寵の民権」は、偉い人によって上から与えられる民権。「回復の民権」は、イギリスやフランスに見られる自分たちが獲得する民主主義です。

歴史を振り返ってみた場合に、私たちは真の民主主義を自分でつかんできたのかという問題が浮かび上がります。これまで安保闘争や無数の市民運動がありました。でも食や水、エネルギー、教育、ケア、いわばわれわれの生活・生命の観点から、本当に腰の据わったデモクラシーをつくってきたかという問題がまだ残っているのではないのでしょうか。3・11の経験は、私たちがその残された課題に取り組むきっかけを与えているのだと思います。

* 質疑応答は原発労働者及び放射能治療、核融合の可能性などに関して行われました。紙面の都合で割愛させていただきます。